アンダーソン | Anderson (1908-1975)

舞踏会の美女

優雅なワルツが流れる舞踏会。そこでだれよりも注目を集めるのは着飾った美女だろう。華やかなワンシーンを音楽で切りとって見せたのがこの一曲。ポップス・オーケストラのための数々の名曲で知られるアメリカ軽音楽の巨匠、ルロイ・アンダーソンの作曲による人気曲だ。

この曲、知らずに聴けば、まるで「ドラクエ」などRPGの一場面のように聞こえるのではないだろうか。王宮の舞踏会で愛くるしいヒロインが軽やかに踊り、主人公を魅了する。そんな光景が目に浮かぶ。

ビゼー | Bizet (1838-1875)

歌劇「カルメン」第1組曲から アラゴネーズ、間奏曲、闘牛士

魔性の女といえばカルメン。ビゼー作曲のオペラ「カルメン」では、スペインのセビリアを舞台に、奔放なロマ（ジプシー）の女カルメンと、堅物の竜騎兵ドン・ホセの破滅的な恋の行方が描かれる。カルメンに誘惑されたドン・ホセは仕事も許嫁も捨てて彼女のもとに走るが、恋多きカルメンは闘牛士を次の恋人に選ぶ。捨てられたドン・ホセは、闘牛場でカルメンを待ち伏せする。捨てられた元カレは今やストーカーに。復縁が叶わないと知ると、激情に駆られてナイフで凶行に及ぶ。

全編にわたって名曲が散りばめられた奇跡の名作だけに聴きどころは多い。本日はオーケストラ用に編曲された組曲第1番より、スペイン情緒満載の「アラゴネーズ」、フルートのソロで知られる「間奏曲」、活発な「闘牛士」の3曲が演奏される。

メンデルスゾーン | Mendelssohn (1809-1847)

「真夏の夜の夢」から 結婚行進曲

世の中にはだれもが知る結婚行進曲が2曲ある。トランペットの「パパパパーン！」で威勢よく始まるメンデルゾーンの曲と、ゆっくりと歩くようなワーグナーの曲だ。本日演奏されるのは華やかなメンデルゾーンのほう。シェイクスピアの戯曲「真夏の夜の夢」を上演する際の音楽として作曲された。劇中の結婚式の場面として書かれた曲が、今やリアルな結婚式のBGMとして完全に定着しているのだ。メンデルスゾーン、恐るべし。

あまりに曲想がハッピーすぎて、聴くと少し気恥ずかしい気分になるのが、むしろ快感。

マスカーニ | Mascagni (1863-1945)

歌劇「カヴァレリア・ルスティカーナ」間奏曲

「カヴァレリア・ルスティカーナ」とは舌を噛みそうになる題名だが、これをあえて日本語にすれば「田舎の騎士道」。ほのぼのした話かと思いきや、実はこのオペラが扱うのはシチリアの田舎町を舞台とした悲惨な殺人事件。兵隊帰りの主人公は三角関係のもつれから、死を覚悟のうえで決闘に臨むことになってしまう。やるせない結末を迎える前に、あたかも興奮を鎮めようとするかのように流れるのが、この甘美な間奏曲。これから血が流れるとは思えないような美しさ……。なぜだ？

スッペ | Suppé (1819-1895)

喜歌劇「詩人と農夫」序曲

喜歌劇とは別名オペレッタ。通常のオペラよりもぐっと軽くて大衆的な作品のことを指す。その内容はおおむね「ラブコメ」。恋あり、笑いありといったところが基本だ。ところが、この「詩人と農夫」がどんな話かというと、実はよくわからない。作品そのものが失われてしまい、この序曲（つまりオープニング・テーマ）だけが演奏され続けている。それくらい序曲（だけ）が傑作だったともいえる。

独奏チェロののびやかな旋律、嵐のような強奏、活発な行進曲に優美なワルツ。聴きどころ満載の名曲だ。

Program Notes

エルガー | Elgar (1857-1934)

行進曲「威風堂々」第1番

テレビCMから、サッカーのサポーターズ・ソング、表彰式や卒業式のBGMまで。日本に「威風堂々」第1番が流れない日があるだろうか。作曲は近代イギリスを代表する作曲家エルガー。イギリスでは第2の国歌として親しまれている。

冒頭で勢いよく開始される行進曲は、小気味よいリズムが特徴的。前へ前へ突進するというよりは、むしろ軽快で、どことなくユーモアも漂う。この行進曲に続いて、中間部で通称「希望と栄光の国」と呼ばれる有名なメロディが登場する。

サン＝サーンス | Saint-Saëns (1835-1921)

歌劇「サムソンとデリラ」から バッカナール

サムソンとは旧約聖書に登場する怪力男。敵を次から次へと打ち倒す恐るべき英雄だ。しかしセクシーなデリラの誘惑に負けたのが運の尽き、うっかり怪力の秘密を教えてしまう。怪力の源はわが長髪なり。デリラの罠にかかったサムソンは髪を切られて力を失ったうえに、両目までつぶされてしまう。

そんな物語をスペクタクルな大作オペラに仕立てたのがフランスの作曲家サン=サーンス。「バッカナール」とは酒宴の場面の音楽を指す。エキゾティックなメロディが熱狂的なクライマックスを築く。

ドヴォルザーク | Dvořák (1841-1904)

スラヴ舞曲から 作品46-1

ドヴォルザークがまだ売れない作曲家だった頃、ブラームスは彼の才能をいち早く見抜き、親切にも楽譜出版社を紹介した。当時、ブラームスのハンガリー舞曲集がヒットして潤っていた楽譜出版社は、ドヴォルザークにも同様の曲集を書いてほしいと依頼した。つまり、民謡風のダンス音楽集だ。これを受けてドヴォルザークはスラヴ舞曲集を書く。楽譜は売れ、二匹目のドジョウを狙った作戦はまんまと成功した。

曲集には土の香りのするようなダイナミックな舞曲が並ぶ。なかでもこの一曲は情熱的でゴージャスだ。

チャイコフスキー | Tchaikovsky (1840-1893)

バレエ音楽「くるみ割り人形」から 行進曲、トレパック、アラビアの踊り、中国の踊り、葦笛の踊り、花のワルツ

それはクリスマスイブに起きた。バレエ「くるみ割り人形」で描かれるのは、くるみ割り人形をプレゼントされた少女クララの不思議な物語。大人たちが寝静まった夜中の12時、クララの体はみるみるうちに小さくなる。クララはおもちゃの兵隊たちに加勢して、ネズミの軍勢に勝利する。すると、くるみ割り人形はステキな王子様に変身するではありませんか！ ふたりはお菓子の国へと旅立ち、魔法の城でさまざまな精たちの踊りで歓待される……。

かわいらしい「行進曲」に続くのは、魔法の城で踊られる多彩な舞曲。ダイナミックなロシアの踊り「トレパック」、コーヒーの精による「アラビアの踊り」、お茶の精の「中国の踊り」、テレビCMでもおなじみの「葦笛の踊り」、そしてバレエ全体のハイライトともいうべき華麗な「花のワルツ」が演奏される。

［曲目解説］飯尾洋一（音楽ライター）